

糸乗 貞喜・尾崎 正利

(よかネットNO.49 2001.1)

事務所がある福岡市の近辺では近年、朝市や直売所は増えている。今までは「安い」「新鮮」ということでモノを買うことに対しては随分馴染んだような気がする。しかし、よくよく考えると、農家の方々がどういう仕事をし、何を考えておられるのか、今まであまり知る機会もなかったような気がする。

たまたま、糸乗が志摩町でご近所づきあいをする中で、元気のいい農家の方々とお知り合いになった。折角だから、まちの人が農家の方と直接話し合う機会を持つということになり、11月30日に第1回会合をもつことになった。

この日、話してもらった農家は志摩町馬場集落から、市川和重さん、田原敏隆さん、友池廣秋さんのお三方。一方、まちの人は農業法人の職員、サラリーマン農家、広告業、出版業、不動産鑑定業、公認会計士、元サラリーマン、農業試験場の研究員、建設省の職員、学生など様々で計12名。

「こういう所に来るのはオレ初めてやけん、何から話すればよかじゃろ？」と言った市川さんをはじめにお三方が次々に話をした。その内容をかいつまんで整理した。

市川和重さん……26歳で先代から代替わりした。その頃、ミカンは大暴落しており、その後20数年間かけて年に13種類の野菜・果物を奥さんと一緒に作るようになった。キュウリの日本酒漬は自慢の逸品。獲れた野菜をもっとお客さんに喜んで買ってもらえるよう、今年9月に自分でスーパー「西鉄ストア周船寺店」に売り込みに行った。「他のスーパーでは農家コーナーなんか作って売っているが、こっちはやらんのか」と聞いてみたら「やりたいからすぐ持ってきてくれ」と言われて販売コーナーをもらい、さらに福岡市内の2店舗(長住、中尾)でもコーナーを得た。スーパーにとっても野菜売場の目玉になっている。普通の陳列棚の野菜の2割高の値でも飛ぶように売れる。

1箇所当たり8～9千円/日の売上げ。良かったと思うのは、今まで買う人と話をするなど全くなかったが、時々出荷しに行く主婦がいろいろ聞いてきて、お客の音が聞こえるようになったとのこと。元々、JAを通じて出荷していたが、今は自分の販路に切り替えた。

友池廣秋さん……古くからみかん栽培をしている農家で2町7畝の栽培面積をもつ。年間通じて7種を栽培している。生産品の9割までを地方市場に出荷し、自分で選果・箱詰めして自分で値を決めて出荷している。1割がJAを通じた出荷。品質が良い時は1kg当たり千円の値がつく時もある。みかんは同じ九州の東松浦地域、さらに愛媛、愛知、和歌山と国内の強い産地があり、同時に輸入品の増大による影響もみられる。みかんは、作るだけでなく市場の販売戦略も大事なのに、昭和40年代に有効な販売戦略を、地元のJAと生産者が一緒に立てられなかったことが今になっては残念。田原敏隆さん……元々、農家の出身ではないが父親がランの花を趣味で作っていた関係で、ランの花に興味をもって農業大学校に行き普及員の資格を得た。志摩町に入籍したのが22歳の頃で、その当時、新規就農という言葉もなく支援体制もなく、土地を借り、水を得て、資材を買うのに様々な困難を乗り越えねばならなかった。借地で始めた栽培も今では3反栽培している。

当日の雰囲気は黙って3人の話を聞いて……という大人しい感じはまるでなく、そのつど質問が出されてそれに答えながらゆっくり進むので時間があつという間に経ってしまった。それでも「初めてやけん……」といていた割には、お三方のお話は大変示唆に富んで分かりやすかったと思う。

この会合は行き当たりばったり風に進めようということだったが、早くも「またやれ！」という意見がみられるので続きは1月か2月の開催で考えたい。